

### 第3回地域のまち・絆づくり検討委員会

1. 開催日時 平成26年9月19日（金） 15:30～17:30
2. 開催場所 福岡市交通局4階 大会議室
- 3・出席委員 【出席委員17名】  
青木委員、石川委員、石森委員、大島委員、木下委員、日下部委員、  
楠下委員、角委員、田代（倫）委員、田代（芳）委員、十時委員、  
中橋委員、日高委員、平山委員、森住委員、山口委員、結城委員
4. 傍聴者 なし
5. 議題 (1)第2回検討委員会における主な委員意見等  
(2)地域住民が主体的に取り組むまちづくりの実現に向けて  
(3)意見交換
6. 議事概要

「第2回検討委員会における主な委員意見等」について事務局より説明

（特に意見なし）

「地域住民が主体的に取り組むまちづくりの実現に向けて」事務局より説明

【委員長】 「ひとづくり」を中心にして、これを「まちづくり」に結びつける、その工程の案が示されたと思う。

【事務局】 平成25年度に実施した自治協議会の運営基盤強化事業について、いろいろな校区で取り組んでいただきましたが、実際、この中にファシリテーターとして十時委員に入っていました。ファシリテーターのお立場から、参考にご意見いただけませんか。

【委員】 ファシリテーターとして数校区関わったが、問題点は結構どこも一緒。後継者不足、それから地域に対して無関心ということ。

私からは、「校区にはいろいろな人がおり、人材はある、発掘できていないのではないですか」と説明し、人材の発掘が必要ということにご理解いただいたように思う。

また、地域活動の内容を地域の皆さんに説明出来ているかどうか、それが出来ていないから人々の関心を集められないという面がある。言い方を変えると、一般の住民には「良いことをやっているから地域活動に入ってきてください」と聞こえるが、それがどのように良いことなのか共有されていない。

ある校区で、地域活動がなくなったらどうなるか分かりますかという質問をしたが、意外と皆さん困られた。地域活動やコミュニティが重要ということが無関心層に伝えていくことは重要だが、伝えていく方、活動している方々がその意義などをミッションとして共有する必要があるだろう。

【委員】 資料にある地域事例で、「あかりのともる新池まつり」、「ひまわりサンデーラジオ体

操」というのはどのような事業なのか。

【事務局】 「あかりのともる新池まつり」は、自治協議会サミット報告資料の11ページですが、「世代を超えた地域住民が参画できる新しい祭りの創設」ということです。こちらについては、いろんな住民が一体となれるような事業ということで、もともと公民館主催事業としてスタートしましたが、小学校を通じて子供たちにぼんぼり等をつくってもらい、それをこの新池のところでともして、皆さんでお祭りをするということです。「ひまわりサンデーラジオ体操」についても報告資料のとおりです。

【委員】 ひまわりサンデーラジオ体操は、毎週実施しているのか。

【事務局】 そのように聞いております。夏休みの期間はどこでも実施していると思いますが、それを定期的に毎週実施するという活動です。

【委員】 人材を発掘し、地域活動の継続につなげていくためには、このように毎週継続して実施できるようなものが良い。いつでも門戸を広げて、皆さん来てくださいよという形で。ラジオ体操だったらお金もかからないし。

私は、もともとおやじの会から活動を始めたが、なぜおやじの会に人が来るかというと、やはり子どもと触れ合うことが楽しいからだと思う。もちろんPTAも似たようなものだが、楽しいと思えない人は次から来なくなる。その人たちに無理に来いというのも難しい。

入ってこられる門戸を常に開いておく。来たい人はどうぞ自由に。そうすれば、興味の湧いた人は長続きする。そういう意味で、このようなラジオ体操を、例えば毎週何時から小学校で実施しているから、おじいちゃんもおばあちゃんも子どももお孫さんも、みんな来れるときに来てくださいよと行政から働きかけても面白いのではないか。

【委員】 私どもの町内では、学校がある日の登校時間に合わせてラジオ体操を行っている。ラジオ体操が終わったら、残れる人だけ、女性は忙しいのでほとんど男性だが、登校していく子供たちに「おはよう、行ってらっしゃい」という声かけを行っている。学校が休みのときはラジオ体操もお休み。ただし、参加する人が固定化し、なかなか新しい発掘ができていない。

【委員】 私たちNPO・グリーンバードでは、天神地区で月・火・木曜日の週3日の定例活動を行っている。組織は11年目になっているが、メンバーは約5,600人。人に困ったことはなく、どうやって人を集めているのかよく聞かれるが、強制ではなく緩い拠点になっているので参加しやすく、そこからふわっとコミュニティが広がっている。

打ち水大作戦というエコ環境活動をプロジェクトとして行っているが、みんなが集まって、浴衣を着て、少し水をまいたら、それは地球環境に良いことになりましたというもの。メッセージの発信の仕方によって「それだったら私たちもできる」というような人たちがお祭り気分で集まって、夏の定例的なプロジェクトになって、各地へ広がっていったような感じである。

実は本庁のアサガオプロジェクトもきっかけをつくらせていただいたが、たとえば廃校になった小学校とか地域、公園、どこでも良いのでアサガオをモニュメント化する。皆さんが苗から植えて、水をあげないと育たないので、その水をあげる作業を町内が当番制で行っていく。実際、ある校区で提

案をしたら、非常に成功した事例もある。

やはり定例的なものやハードルが低い活動が必要ということ、もう一つ、それに相重なって必要なのは、独自財源を生むような生産性のある活動になれば、人づくりは結構解決するのではないかと思う。あとは、魅力ある企画づくりとか、見える化とかという言葉が出てきているが、そういうことではないだろうか。

【委員】 地域で入りやすく、また、よくやられているなど感じるのが子どもたちを見守るパトロール。子供たちの笑顔が楽しくて活動しているという人が多く、どこの校区に行っても、シャツを着て、おじいちゃんと言ったらいけないが、楽しそうに見守りをやっている。まさに元気な高齢者だと思う。その元気な高齢者を地域の中に引っ張り込んで、楽しいものにしていくというのが一つのきっかけになるし、彼らの中から地域の幹部を養成していけると思う。

【委員】 地域デビュー応援事業について、町内の防災と防犯関係で申請しようと考えたが、区からだめと言われた。交流というのはうちの町内はできているので、その上の段階をするときにも助成していただくとありがたいのだが。

【委員】 地域デビュー応援事業は、現段階で何件ぐらいの申請があって、いくらぐらいの金額が補助されているのか。

【事務局】 金額まではこの場で資料がありませんが、現時点で約100件の申請があっております。

【委員】 事務が煩雑過ぎて、申請になかなか積極的になれないというような声もあった。

【事務局】 地域デビュー応援事業は、住民同士の交流を目的に開始いたしましたので、ご意見のようなパトロールなど、ボランティア活動的なものだけの内容であれば対象とはしておりません。交流事業の一環で、併せてパトロールも実施するという内容であれば認められると思います。

事務手続については、できるだけ簡素化しているところですが、補助金という制度の中で最低限必要な様式です。今後、さらに簡素化できないかどうか検討してまいります。

【委員】 防災や防犯などの必須事業は、多くの方は仕方なく出ているように感じる。一般の住民にとってネックになっている。地域活動の必要がなければ団体に入らなくても済むわけですから。

人はいるが、他に楽しいことがあるわけだから、相当の意志を持っている人でないと入れない。ただ、中にはやりたい人もいるわけで、今やっていることを楽しくする発想がいるし、昔のように一度入ったら逃がさないという雰囲気ではいけない。気軽に参加していただくことが重要。

地域デビュー応援事業も、そのような発想から生まれたものだと思う。

【委員】 せっかくそういう制度があるので、これは内容がだめというのではなく、柔軟性を持ってそれに応えてあげる、それが一つのインセンティブになるのではないか。やる気につながるわけですよ。そういうせっかくやっていただけるのを使わないと地域活性化にはつながらない。

今聞いた話では、あまり使っていないような気がする。南区でもあんまり聞かないし、自主財源がないところ、アイデアが足りないところなど様々とは思いますが、申請書が無理なく出せるような手助け

がいると思う。

【委員】 防災運動会みたいなタイトルにすると、結構認められる。

【事務局】 いろいろな他の地域の事例を集め、参考にしていただけるような工夫をしていきたい。今回の地域デビュー応援事業というのは、楽しみながら皆さんが顔見知りになって、いずれは地域の活動に参加していただけるように、また、福岡市としては初めての自治会・町内会への直接的な支援というところがあります。やはり地域活動というのは、町内会レベルが活性化しないと、校区の活動の活性化も難しいので、このような制度を活用していただきながら、次の活動につなげていただけたらと思っています。

【委員】 2ページの地域活動者の発掘・育成プロセスのところで、①の「まずは地域行事への参加者を増やす」、これは当然のことだが、その方たちを地域活動にいざなっていくという②がすごく難しい。参加はしていただけるが、参加したら即、地域活動の担い手になっていただけるかという、それはない。

【委員】 私ども敬老会で、抽せん会というのを初めて行ったが、それが結構良かった。地域活動につながるかどうかというのは分からないが。

【委員長】 参加者を活動者へとつなげていく良い案はないだろうか。

【委員】 今、ワールドカフェみたいなものが流行っているが、何か新しい会合で、最後まで片づけをしている人がいたら必ず離すなと昔から言われている。つまり、その人の適性を見極めるということが大事。

たとえば、男女共同参画のワークショップを新しい人だけでやっても、グループを見て「この人はすごいよね、誰？」と言って誰も知らないという人がいたら、ちょっと後で声をかけておけば、2年後ぐらいには活動家になっていたりする。そういう不特定多数の方が集まったときは、人を読むことが大事。そして、唾をつけていく感じ。そういう目で見ていかないと、イベントは終わったままになる。

また、青少年も20年経てばということで、道で会ったら必ず声をかける。挨拶だけじゃなくて、今度こんなことをするから来いと。そういう知っている人間には、人ごとに情報を聞き、渡していく。そういう広がりを持っていかないと、人は地域の情報なんてかぎ取ろうとしない。

何かイベントやワークショップがあるときに、前日に声をかけると2割は増える。あの人から声をかけられたら一歩踏み出すという場合もある。そういう視点も大事。

【委員】 これまで何十年と活動してきたが、人にはいろいろ不得手な部分と得意な分野があり、それを早く見抜いて、不得手な部分はその人が自信を持てるまで周りがいかにフォローアップするか、得意な分野はどんどん伸ばしていけるようにしている。

私はどこに行っても、初めて参加された方には、何町のどなたさんですかと必ず聞く。名前をメモしておき、次にその人に会ったときは、「〇〇さん、おはようございます」と言う癖が何十年とついている。そうすると、「ああ、名前を覚えてくださっていた」と思っただけ。

それをきっかけに、校区活動に関わっていただいた人がたくさんいる。30代、40代、50代が育ってきている。

そういう30代から50代の人が、校区独自の夏祭り大会を自分たちで実行委員会をつくって始めて10年目になる。新しい人を発掘するには、どんなに回覧出して広報を出すよりも、やはり口コミが一番と思う。

それと、町内会だけではなく、いろいろな団体を巻き込んで、その団体の会長が自分の団体の会員へ、老人クラブは老人クラブの組織、民生委員さんは民生委員さんの組織というところから全部声をかけていただけると、違う顔ぶれがたくさん集まって一つの事業ができる。

【委員】 会長が何でも独断でやるようになると、なかなか人が集まらず、育成も難しいと感じている。地域にはすばらしい人がたくさんいるから、いろいろな団体が集まって実行委員会をつくり、新しい人に実行委員長をしていただく、それだけで裾野が増えてくる。私の校区では、新しい役員さんも入ってきて成功しました。

【委員】 皆さんの話を聞いていて疑問に思ったのは、人は集めないといけなのかということ。

オランダ人の友人が言っていたが、オランダ人はヒマワリを植えて高さを競う。それを地域みんなで、あのヒマワリは良いとか悪いとか、ぐるぐる回りながら投票する。もしかしたら人が集まらなくても、自分の家の前にヒマワリを植える、それ自体が参加なのではないだろうか。それに参加した人たちが投票して回って、「あの人、よかったよ」なんていう会話をしていくと、ちょっと巻き込まれた感で必然的に参加されていて、ネットワークが出来ていくのではないかな。

皆さん、地域に住んでいることを誇りに思われている。やはり、地域に関わっていることを誇りに思わせないといけない。つまり、関わらないことが格好悪いとか残念だというような雰囲気づくりができれば良い。いわゆるシビックプライドというような、地域を誇りに思わせるような考え方。

インセンティブの話についてだが、例えば地域通貨としてスーパーに協力してもらって、3%でも2%でも出してもらえれば、それは活動に参加したことの意義とか、地域におけるそのスーパーの意義というのが出てくるのではないだろうか。

皆さんの話を聞くと、すごく好循環に回りそうなアイデアにつながるキーワードがたくさん出てきていると思う。

【委員】 私の経験からして、自分の意思で、自分一人で参加申し込みしたり、参加したりできる人は少ない。そこで誰かが声をかけてやって、来てみたら、終わって帰るときには「今日来てよかった」という声が8割。あとは、その人が2回、3回と出てくるような周りのケアが必要。

【委員】 校区で防犯パトロールを月に3回やっているが、私の町内からは、当番制ではなく、自発的に参加していただいている。自発的にそういうふうに参加していただく、協力していただく人があるとするのは、結果的にそういう事業について評価があるからだと思う。いろいろな形で企画して実施して、後でこの事業は良かったかどうか、住民の皆さんにもアンケートなどで意思を確認する。そのような仕組みの中で、自然的にそういう事業の世話をしてくれる人材が育っていくと思っている。

【委員】 ボランティア活動をしたいという気持ちはみんな同じように持っていると思う。ただ、NPOで参加される方というのは、自分の意思で自由に参加して、いつでも辞められるという保障があ

る。

地域というのは住む場所なので、しがらみもあるし、初めての活動にはある程度覚悟が要る。自由に抜けたり入ったりすることができないと思っている。私たちもいろいろなことを企画するが、気楽に参加してもらえないという面が少しあるのかもしれない。

定期的を実施して自由に参加できるというか、自分の意思で参加できる機会を多目につくるということと、興味のあることを比較的持っていていただくということと、やはり重たくなならないように「来たいときだけでもいい」という雰囲気づくりも必要だと思う。

【委員】 それは、本音の部分だと思う。やはり地域が背負い過ぎている。背負わずにやるならば参加でいい。背負っているから、人材とか、次の申し送りとか、継続しなければいけないという気持ちがあり、活動をやめられないという面もある。

地域が一番の問題は、今、やっている活動をやめられないこと。新しい事業ばかり入ってくるが、やめることにものすごく苦勞する。それは、先ほど言われたように評価がないから。

私はボランティアセンターにいたが、地域はボランティアではないのかもしれない。奉仕でやっている人たちが多すぎる。自分たちが面白くないのを無理やりやっているという状態が続く限りどうしようもない。

そういうところがNPOとは違う。苦しんで活動することはNPOではあまりないかもしれないが、地域には結構ある。やらなければならないという義務感。

【委員】 役員になれば、後継者を育てるまでやめられない結果、長く続ける人が多い。そして高齢者になっていく。団塊の世代の人たちに働きかけているが、なかなかうまくいかない。まだ仕事があるからと。

【委員】 女性協議会から始まり、もう何十年も校区で活動してきたが、私たちの時代は専業主婦が多い時代だったのが、今はちょっと違ってきているので難しい状況になってきている。今は、男女共同参画協議会でも、「当日だけだったら」と言われる。

結局、人材というのがなかなか確保できない。あらかじめ長くならないよう、任期をしっかりと定めることも必要。

さきほど「地域活動がなくなったらどうなるか」という話し合いの場を設けるという意見があったが、話し合いの場には地域に関わっている人しか参加しないので、関わっていない人は何も議論する場がない。

昔は名士が自治会長になって、ずっと続けてというのはあったが、今は本当に難しくなっている。

【委員】 町内会でも自治協議会でも、楽しく活動を広げているところは、次の担い手たちがいつの間にか見つかって、あんまり心配していないというところがある。1割にも満たないが。

【委員】 それは今さっき言われたように財源かもしれないし、何かを見出すためのことをやっているようである。地域活動を義務的にやっているのではなく、何か楽しいことをやりながら、皆さんに返しているというところは出てきている。活動をやめて「新しい運動」をやっている。そのやめるという勇気はどこから出るのか、ちょっと私もわからないが、やっているところは結構ある。

地域を背負っていない人たちが出てこなければいけない。地域活動は大変というイメージを持たな

い人たち。悪い方にイメージする人たちが多すぎる。

【委員】 地域活動と言ってNPOをイメージする人や、これは楽しみだと思える人は一人もいない。これはちょっとびっくりするぐらい固定概念がある。

【委員】 行政と地域の協働ということをやっているが、昔よりも、行政の方も地域を必要に感じていると思う。地域の力を借りなければできないことがたくさんある。そういうことにはインセンティブやちょっとした手当なども必要ではないか。地域で頑張ろうという気持ちになってくると思う。

何かしたいという方がたくさんいるはずだが、やはり忙しい、働いてお金を稼がなければいけないという考えがある。我々がするのはボランティアであり、そういうものではないが、やはり行政と協働でやる事業については、何らかの形で考えていく必要があると思う。

例にとると、国勢調査。人集めは本当に大変。人選もさることながら、ずっと頭を下げて回らなければならない。調査員は報酬があるかもしれないが。

【委員】 地域活動への参加について、ひとつ参考事例を紹介したい。先日、校区の役員会をしたが、ある会長から神戸の事件について触れられ、朝の見守りというのは結構どこの校区もやっているが、下校時については、私の校区ではあまりやっていない。そこで、元気な高齢者もたくさんいるので、下校時に、例えば犬の運動を兼ねた見守りとか、また、散歩を兼ねた見守りをしてもらったらどうかという、非常にいい提案があった。

【委員】 大体事件は朝よりも下校時が多い。私どもは、下校時は、学校があるときは毎日パトロールをやっている。いろいろな団体がありますから、当番制という形で。全部で百何十人はいるかもしれない。

【委員】 子どもの下校時、うちの校区では、申し合わせじゃないけれども、各町内レベルの回覧等で、午後のウォーキングをされている方々に見守りという形で、何か気づくことがあったら公民館なり町内会長さんなり、誰でもいいから声かけてください、それプラス110番してくださいと周知を図っており、「何かあったら110番」が合い言葉になっている。

【委員】 私どもの校区でも同じように、ウォーキング、犬の散歩、いろいろな時間帯にされているので、そういう方たちを1年に1回集めて、決起集会をしている。100人ぐらいは集まっている。

そこで腕章を渡し、とにかく散歩とかウォーキングとかされるとき、腕章だけしててくださいと。それだけでもかなり抑止力になる。何かあったら公民館や110番に連絡してくださいということ。

その方たちに対する義務というのは、決起集会に出ることと、年度途中で1回、防災の講演会をご案内するだけ。あとは自由に自分の時間で見回ってくださいということをやっている。

【委員】 こっちで勝手にしていたら、勝手に好きな人たちが生まれる。

【委員】 すごいですね。そうしたら、年1回、一つに集まるわけですね。

【委員】 決起集会、10月1日。集まってプラットフォームをつくっている。

【委員】 その決起集会に来てくださいというのは、どうやって声をかけるのか。

【委員】 各家庭にチラシを配っている。その下に申込書を入れて。

【委員】 ここにいる皆さんの校区というのは、おそらく地域がしっかりしていて、PTAとの話し合いもかなり綿密にされていると思うが、正直言ってPTA役員のなり手は少ない。1年、2年という限定をつけて、ある程度仕方なしに受けている方も多い。

その方たちに、あなたの役目は地域との窓口だから、自治協議会の会議に出て、PTAの話をしなさいよと言っても難しい。なかなかそこが、PTAというか、学校は何をやっているのかと言われることになる。例えば見守りをお願いしても、学校関係者がいないではないかという話になる。

また、校長先生や役員が変わると、今までうまくいっていたものが回らなくなることも多い。だから、校長先生にはその地域との連携を上手にさせていただくように話はするが、なかなかうまくいかない場合もあり、我々の正直な悩みである。

【事務局】 うまくいっている事例と、悩んでいらっしゃる事例というのは、共通する部分もあるのかもしれませんが。私も行政のほうも、そういった事例を少しでも多く、地域の情報を収集していく必要があると感じております。

また、いろいろお話の中で、地域に関わっていない人をどうやって議論に参加させていくかということですが、やめる勇気とか、評価ですとか、多様な参加という部分で、より多くの方がその地域のことに関われる仕組みというのは必要なのかもしれません。

【委員】 防犯の観点で、犯罪率が多い地域というのはデータとしてあるのか。

【事務局】 データとしては、いわゆる率と認知犯罪件数というのはあります。

【委員】 それを分析したときに、例えば、それが地域活動とリンクしたりするものなのだろうか。シカゴの事例だが、落書きをされた側がペナルティーを受けるという逆転発想がある。それだけ隙があるということ。アメリカ的発想ではあるが。

私が関わっている事業で朝キャンパスというのがあるが、青空の下で朝活動を行い、抑止力とか抑制力で犯罪をさせない雰囲気づくりとか、夜のまちのイメージを払拭させる、そういう意味がある。だから、一つ、直接的な犯罪を防ぐということも大事だが、そのまち自体が隙をつくらないように、地域活動をプランティングすることも大事だと思う。

【委員】 地域事例で新人の研修の話があったが、まさに一番足りなかったのはそこだと思う。一般の校区の住民は、青少協とか市Pとか専門用語を言われても理解できない。

もう1点は、この世界の専門家はいないということ。きっと皆さん、活動者一人一人が専門家なのだと思う。みんなで意見交換すれば、8割は解決しますよと私はいつも言っている。

また、私もアンテナを張っていろいろな情報を収集しているが、「そんなことをやっているんだ」「知りたかったよね」という情報もある。正直、行政の担当者も3年で変わるし。

対話をしながら、何か井戸端会議ができれば、次が出てくる。先ほどの「腕章して犬の散歩」とい



う話も、人々が集まったら対話がありますし、やる気が起こるのだろう。一緒になると何かやれるというのはキーワードかなと思った。

【委員長】 この2ページの図だが、地域人材の発掘・育成には、Aの層にいざなって行って、Aの層で継続していただくということか。

【事務局】 実際は、そのAの層に行くところが壁というか、高さはあるのかもしれないし、もしかしたらNPOであれば、そこにまた何段階かあるのかもしれませんが。

【委員長】 ラジオ体操に行きたいときには行ってみようとか、地域を誇りに思ったり、その地域にアイデンティティーを持っていたり、ヒマワリを育てて参加しようという人たちは、ここではBのあたりに位置づけられるのか。

【委員】 やはり地域活動者のAが何種類か違うパターンがあるのだろう。

【委員長】 1ページ目の要素だが、今日も人づくりと言いながら財源の話もあったし、交流や議論の場、ワークショップの話もあったし、先進事例の中には情報も大事だということもあったと思うが、相互に密接に関連しているのだろう。この四つを選ばれた経緯というのは何かあるのか。

【事務局】 これまでのアンケートや、地域のご意見の中で、何が課題になっているか、どういうものが必要なのか、それをカテゴリー化するという方法でまとめさせていただきました。

【事務局】 今日のお話の中で、皆様の地域の方々が、非常に多くの方が参画すること自体が、そういう人づくりで地域の担い手ですとか発掘につながっていくのではないかということで、私どもでご提案させていただいておりますのがまちづくり計画ですが、このように、みんなで課題を共有するという手法も一つあるのかなと考えております。

特に、ワークショップ的な形での議論というのが、やってみたら意外とよかったという意見も多数いただいております、平成25年度は実験的に限定された校区で行わせていただきましたが、一つの校区で目標を持って、それにみんなが関われるような、巻き込んでいくような仕組みなども必要かもしれません。よろしければ、次回等、もう少し詳しい説明を含めて、これまでの皆さんの意見もまとめた形で少し提案させていただければと思っております。